



パラオ通信

No. 3 3/10/2019

JICA 海外協力隊 SV 天野久雄

JICA 海外協力隊員の仕事 水族館



今回はパラオ国際サンゴ礁センターで働く、伊藤さんに話を聞きました。伊藤さんは2017年の6月までJICA 隊員としてパラオ国際サンゴ礁センターで活動していました。そして昨年11月より同センターのスタッフとして勤務しています。東京都出身の女性です。

天野：どのような仕事をされていますか。

伊藤：水族館の展示やお土産、イベント、PR 関連の企画やデザイン制作です。

天野：パラオ水族館の見どころは何ですか。

伊藤：パラオ・オウムガイですね。この種はオウムガイの中でいちばん大きいのがこちらです。深海生物で、深さ100～600mぐらいのところにいるとされています。日本では鳥羽水族館のみが飼育しています。昔のパラオ人はかごの中にチキンを入れて、海中に吊り上げて捕獲したといわれています。たいそうおいしかったそうです。今は保護されていて食べる事はできません。



オウムガイ

天野：オウムガイは泳ぐそうですね。

伊藤：速くははなませんが、思ってるよりは速く泳ぎます。パラオ水族館ではオスとメスを飼育しています。メスが時々オスを追い回してたりします。パラオの女子もアグレッシブなので、先日その話をパラオのお客さんにしたら「パラオと同じね」と言われました。



マンダリンフィッシュ

天野：ほかには何がいますか。

伊藤：マンダリンフィッシュ、和名をニシキテグリといひます。派手な魚です。パラオでも特定の場所にしかおらず、小さいため見つけることが困難です。ここでは水槽の中に普通にいます。

エクシリアス・アキヒトもいます。白いからだに黄金の斑点がある魚です。ハゼの研究者でいらっしゃる平成天皇陛下に発見者が名前を献上し、アキヒトとつけています。とても高貴なお姿です。アケボノハゼもいます。美智子皇后が命名の提案をされたことで知られます。からだの色が朝やけのようであることからご提案されました。生息する場所が水深30メートルぐらいと深いので、ダイビング初心者の私は、まだダイビング中に見たことがないです。



エクシリアス・アキヒト



アケボノハゼ

天野：カメやナポレオンフィッシュなど大きな魚もいますね。

伊藤：カメはタイマイとアオウミガメですね。タイマイはその昔、パラオでは甲羅を熱加工してお皿のような形にして、お金として使っていた歴史があります。タイマイはインド洋、太平洋、大西洋に広く分布はしているものの、最も高い絶滅危惧の評価がついているウミガメです。パラオではダイビング中にかなりの確率で見られます。その点でもこの国は素晴らしいのです。もちろん捕獲は禁止されています。

天野：アオウミガメはどうなんですか。

伊藤：そこまで個体数が減っていないこと、またパラオの食文化ですので、パラオの人は普通に食べてます。オープンシーズンであればヤノフーズで売ってる時もあります。ただし、世界的には絶滅危惧の評価は高く、夏場の産卵期間3カ月とフェスティバルシーズンの12月・1月が例年、禁漁期間となっています。また、メスが浜にいるときは近づくことは禁止です。お祝いなどの料理で、よく出ます。バーベキューとして出たり、ココナツミルクなどで内臓を煮込んだ料理も私のステイ先では出ます。

天野：水槽で泳いでいるナポレオンフィッシュも魅力的ですね。

伊藤：ちっちゃいやつですが……。前はもっと大きなものがいたそうで、でも7、8年くらい前に盗まれてしまったようです。どうも夜中に船で忍び込んだようです……。

天野：そんなに大きくなるのですか。

伊藤：パラオブルー・コーナーというダイビングスポットでは2mぐらいの有名なナポレオン・フィッシュがいます。

天野：こちらにいるナポレオンフィッシュも大きいと思ったのですが。

伊藤：60cmくらいかな。いま10匹近く飼育していますが、だんだん大きくなっています。もうちょっと大きくなってくれるように期待しています。稚魚もいます。ちなみに、ナポレオンフィッシュはパラオ語では大きさにあわせて3つ名前が変わるんです。パラオ人が食べごろを選んで大切にしてきたからだと思います。



ナポレオン・フィッシュ（中央の青い魚）



開放的な水槽で餌やり

天野：私はここで見た、テッポウ魚が餌をとるデモンストレーションも面白かったです。

伊藤：これは日本でやっている水族館もありますが、ここではマングローブの林の中でやっています。事前にご連絡いただくか、3:30の餌やりの時間に来ていただければ、デモンストレーションをやります。

天野：水族館の玄関に大きなシャコ貝がありますね。シャコガイもパラオの海ではよく見られるのですか。

伊藤：いっぱいいます。クラム・シティっていうオオシャコガイがいっぱいいるシュノーケルスポットもあるくらいです。養殖もしています。普通に食べますから。レストランでも出ます。



シャコガイ

天野：ここでの仕事はどうか。

伊藤：とても楽しいです。私は日本では広告業者に勤務するデザイナーでした。そのあと、ボツワナの博物館に3年弱、長期のJICAボランティアで派遣後、パラオに来ています。

いろいろなクライアントと仕事をしていましたが、水族館など、海洋関連の施設で働くのは初めてで、サンゴ礁や海洋について勉強することがたくさんあります。

展示物を作るには研究者との打ち合わせが必要で、そういった会話では専門用語が飛び交います。研究者はあまり一般には、わかりやすいことばを使わないので大変です。わかりにくいものをわかりやすく、ひとが見たいと思うものに変えるのが仕事です。

また、根本的に日本のアミューズメントに偏った水族館と違い、環境保護団体としてのミッションでパラオ水族館を運営しているので、その背景をふまえた企画やデザインをしなければなりません。日本ではできない仕事が、こちらではできます。

インタビュー後の感想

伊藤さんの話から、パラオ生活を楽しみながら熱心に活動されていることがわかりました。パラオに来た時は、ぜひ水族館も見学してください。（天野）

おまけ

水族館のスタッフの方が提供された魚やカメ、スタッフの写真を追加します。次回も、ほかの JICA 隊員の活動を紹介します。お楽しみに！



水族館の周囲



陽気なスタッフ

